〈研究ノート〉

攻撃性と内的現実の相対化についての一考察

津　田　尚　子*

A study of aggression and the relativization of internal reality

Naoko Tsuda

要約：私たちは内的現実の中で生きている。そのために、自分の内的現実が現実だと思っている。しかし、自分の見ている現実は自分ひとりにとっての現実に過ぎないことに気づくことがある。それは、たいてい攻撃的な表現を誰かに、反発や仕返しでない形で受け止めてもらえたときである。そういう点で、内的現実が相対化されるときに攻撃性が関与しているといえる。本論では、精神分析で攻撃性を論じた Klein と攻撃性の起源と発達を紹介した Winnicott の論文を基に、攻撃的な場面での対応を、その性質の観点から論じる。

Abstract: We each live in our own internal reality and are therefore confident that this internal reality is true. However, awareness of the reality that each individual believes in being only their own internal reality is realized when aggressive actions are conveyed by that individual without resistance or revenge from the other person. When one's internal reality is altered, aggression can play a major role in the process. In this paper, the author discusses approaches for coping with aggression, from a qualitative point of view, based on Klein's psychoanalytical work on aggression and Winnicott's work on the origin and development of aggression.

Key words：内的現実 internal reality　相対化 relativization　攻撃性の起源 origin of aggression　発達段階 the stage of development　表現 expression

Ⅰ．はじめに

私たちは 2 つの現実を持っている。それは外的現実と内的現実とに区分される。外的現実は個人の存在や認知とは関係なく事実として存在しているものである。内的現実は個人によって認知されたものによって形成されている現実である。外的現実と内的現実はその成り立ちから質的に異なるものであるが、完全に別個のものとすることはできない。外的現実として認知・認識されるものは、必ず個人の必要性によって意味づけをされ、加工された上で認知されたものである[1)]。つまり、すべて人が語る現実はその人の内的現実ということになる。人は自分の内的現実を通さずに外的現実を見ることができない[i)]。認知の枠組みに入らない現実は、存在していてもその存在を意味あるものとして感知することができない。私たちは常に内的現実を生きているといってもいい。

しかし、内的現実は必ずしも絶対的なものではなく、折々の生活場面で「先に認識していた現実は自分の思い込みだったのではないだろうか」と相対化されることがある。心理療法などで治療者の解釈により世界観が変わるというのは、この相対化のひとつの例である。多くの人にとって日常場面ではそれは気づきとして訪れる。この気づきは発達を伴う一局面でもある。

経験則だが、ひとつの内的現実が相対化する時、なぜか攻撃性と絡んでいることが多いように思う。多くの心理療法報告で、攻撃的な願望が内的現実に含まれていることを指摘されることにより、内的現実が変容する様子が報告されている[ii)]。攻撃的な言動で他者を払い退けよう完膚なきまでに破壊してしまおうとする状態から、攻撃的な願望を抱かざるを得なかった自分自身を愛おしく受け入れるようになる。攻撃的な言動は必ずしも消失す

受付日　2018. 5. 25 ／ 掲載決定日　2018. 9. 13
*関西女子短期大学　准教授

るとは限らないが、「攻撃性の化身」そのものになってしまった個人から、個人の中に攻撃性を「思いの残り火」として保持することができるようになる。

上記のような過程に至る介入を、心理療法の世界では「攻撃性を取りあげる」という表現をするが、実際に攻撃性を取り扱うのは難しい。攻撃性は表立って現れるとその激しさに圧倒され本能的に弱腰になるし、巧みに隠されていると見つけにくい。同じ勢いで向き合うと「反撃された」とも受け取られかねない。それを取りあげようとする人には、攻撃性の本質を熟知して、かつ攻撃性に囚われず向き合う姿勢が必要となる。攻撃的な言動を抑え込んだりかわしたりすることは、攻撃性を取り扱ったことにはならない。

本論では、気づきに影響を与える攻撃性の本質と発達を先行論文より学び、攻撃的な場面に対する対応について論じる。

Ⅱ．本　論

1. 対人関係の中で表現される攻撃性

Klein, M. は、児童に対する心理療法で、様々な神経症状のもとになっている幻想 phantasy を取りあげ、死の本能に起因する攻撃性が大きな役割を果たしていることを論じてきた。論文「羨望と感謝」（1957）では、その攻撃的願望が大人の心理療法に表れていることをいくつかの症例によって紹介している。Klein は、症状や行動形成の背景にある攻撃性には羨望や貪欲といった心情が関与しており、それらが分析過程の中で分析家に対して攻撃的因子を含んで表現されることを示した。羨望とは、対象（他者）によって自分に見せつけられる（と思えてならない）魅力的で有能な性質を、それを見ることにより掻き立てられる感情を収めるために破壊してしまいたいと思う無意識的願望である。貪欲というのは、魅力や有能さを完全に自分に取り込んで、もともと魅力や有能さを持っている対象を無価値なもの（カス）にしてしまいたいという心情である。Klein の分析では、分析家を誉めそやすような場面も、被分析者自身の羨望によるバランスをどうにか取ろうとしている防衛の一端に過ぎないと論破する[2)]。様々に向けられる治療者に対する攻撃をものともせず、被分析者が、そのような防衛機制にすがらず、分析を有効に利用して人生を前進させようという意志を持てるようになることを期待した。Klein は、同論文で心理療法において「葛藤とその葛藤を克服しようとする欲求こそが創造性をもたらす重要な要因」（1996）と考えていたので、葛藤の七転八倒の中で攻撃的な要素を向けられてくることにも治療者は耐えて、自ら昇華して創造的な活動に移行していくのを見届ける必要があると考えていた。よって、「幼児が泣き出すと、いつであれすぐさま食物を与えてしまう」親の態度は、親自身が自分自身の不安に脅かされないようにするために、子どもの創造的な第一歩をくじき、表出を抑制するものと見なしていた[2)]。

Klein は、死の本能を人間の属性として初めからあるものと考え、幼児であっても、死の本能の発露としての攻撃性に向き合い、死の本能に抗するための攻撃性をのびやかに、しかし自覚的に用いることを求めた。攻撃性を自覚的に外的（社会的）な責任を引き受ける覚悟で用いることにより、社会的な責任やそれに伴う費用負担は大きくなるが、それにより心理的負荷は必要最低限になる。しかし、社会一般で通例となっている謝罪や弁済という形で責任を果たせるものと思えず、本能からの脅かしとして感じている状態だと、脅かしから免れるために心理的な操作を必要とする。怯えや不安に心が押しつぶされないように、自分なりの現実解釈、つまり幻想、本論でいう内的現実を自分の必要性に則して構築していく。攻撃性を取り扱うことは、その幻想に囚われて脅威におびえている心理状態と攻撃的行為の責任を回避しつつ姑息に危害を加えている実態への気づき、ふとした瞬間にかすめる罪悪感からの解放になる。怯えや不安、攻撃の応酬が自分で作り出した幻想だったことに気づき、見ていたと思っていた世界とは全く違う外的現実の存在が見えてくる。この時、幻想の中で展開されていた攻撃的な面に振り回されない、まるで傷ついていないかのように見える分析家の姿勢が、攻撃的な思い込みから自由になりつつある心に、「私が現実だと思っていたことは思い込みだったかもしれない」という気づきの扉を開くのである。

2. 攻撃性というもの

Winnicott, D. W. は、Klein に分析を受けた後、独自の臨床を展開した精神分析家である。精神分析に触れる前から小児科医であった Winnicott は、子どもとその家族の日常的な姿を承知していた。

Winnicott の「攻撃性の起源」（1964）という文章で、攻撃性の始まりを知ろうと思ったら、乳幼児の運動という事実に行き当たるということを書いている[4)]。出産前に幼児の体の一部が動き、そうして動いた部分が何かに触れることがその運動にあたるが、その時点ではまだ攻撃性と呼ぶには似つかわしくない。なぜならば、乳幼児（胎児もしくは新生児など）は運動で筋肉を動かす快感を得ているけれども、「行動にはっきりとした理由を持っていない」段階だからであるという。新生児が金切り声をあげている時ですら、はっきりとした攻撃的な意味

があるわけではないという。攻撃性が愛と結合して、「噛みたいという衝動で、その衝動は生後5か月以降から意味を成す」（1964）としている。同様に教育者に向けて執筆された文章「攻撃性」（1939）では、「この本能的な攻撃性に関して（中略）重要なことは、－それはまもなく憎しみの力で動かされるものになるけれど－それはもともとは食欲の一部であり、また本能的な愛の別の形である」「そして、それは興奮している間に強まるものであり、それを行使することは非常に楽しいこと」と子どもに認識されていると強調している[3)]。つまり、攻撃性の発端は活動性と言えるものであり、当初は対象を特定して憎しみを向けるようなものではないのである。

攻撃性は次第に形を変えていくが、すべての攻撃性が一足飛びに、憎しみに代表されるような破壊的なものになるとは限らない。Winnicott の「攻撃性」（1939）の記述を要約すると、攻撃性には攻撃性の発達過程があり、その時々の周囲の受け止めによって、社会的に大変好ましいものから厄介なものに変容する可能性があるという。例えば、哺乳中に自分の食欲によって愛する乳房を傷つけないように、乳児はすでに気を遣っているといわれている。たまたま興奮が勝って危害を加えてしまったとき、その攻撃が向けられていないかのように受け止めてもらえると、うっかり我を忘れて傷つけてしまったその罪を重く感じないでよくなる。乳房に対する気遣いでたまった欲求不満は、幼児がその時まさに「悪と知覚した外的現実と戦うために動員され」（1939）大泣き等として表現されるが、その時も身体的世話とともになだめてもらえたら、身体的満足のうちに鎮まる。さらに、自分でもどうしようもないほど、残酷で破壊的な力で凌駕されそうになったら、自分の内面を外側に裏返しにし、内的世界を外的に表出、自ら破壊的な役を演じて、外から権威によって統制されるように仕向ける。心の外に出すことによって、攻撃性を取り扱いうる最後の期待を外界に託しているのだ。外在化しなければ、自分の内部でその攻撃性と戦うことになり、勝ち目のない消耗戦、はたから見ると抑うつと呼ばれる状態に陥る。外在化するにしても内的に溜めておくにしても、この段階に至っていると、すでに本人のいかなる努力も機能せず、絶望的な内的現実を抵抗するすべもなく見せられている状態になる。精神分析は、この事態に治療構造と解釈でもって根本的に解消するよう挑む。しかし一般の生活場面では、社会のルールを根拠に、責任を強いるように大人が迫ることになる。しかし、この大人のふるまいは、権威を死守しないではいられない大人自身の不安から発せられるものなので、子どもは自分の攻撃的な表現による訴えに気づくことなく、権威に表面的に適応し、権威で迫る大人同様自他に対して容赦なく残酷に管理するような大人に育っていくと、Winnicott は、懸念している[3)]。むしろ、その表現の適性さ不適性さのところで押し問答せず、黙して訴えの本質を見極め、その必要性に合致した支援と環境を用意する必要があると主張している。生活場面としては困難な場面であるが、心理的には攻撃性の外在化といえる場面なので、その表現にはまだ他者に対する期待と好転する可能性を信じようとしている部分が残っていると考えられるからだ。

幼児期より、本人に対処しきれない心情は、内的に魔術的破壊という空想で処理され、生活場面では競争心や創造的な表現へと昇華していく。償いや回復は、攻撃性が否定されていないこと（破壊的側面に対する責任を個人的に受け入れること）が前提で、攻撃性を否定されてしまうと感傷等不健康な状態になってしまう。

少年期に入り、子どもは自分の影響力を見せつけるために攻撃的な言動を発していく。初期は欲求不満の表出でしかなかったものが、自分の力を見せつけるための不愉快な行動になっていく。不愉快な行動として、Winnicott が挙げている例としては、楽しく終わるはずだった家族旅行が子どもの腹立たしい行動のために台無しになるというものである。その際に、大人に指摘され対応してもらっているうちに、子どもたちの幻想の中で自由にできる区域とそうでない区域を習得していき、自己主張や知的探求という方面でうまく攻撃性をつかえるようになっていく。

子どもが青年期（思春期）になる頃、権威を準備して、攻撃性が手に余るものにならないように、悪が表現されても危険なく楽しめる範囲にするのが大人の仕事になる。攻撃性を昇華させるような場面、すなわちゲーム[iii)]や仕事において青年の競争力を掻き立てる場面を用意する。そして、徐々に権威を撤退させ、子ども自身の抑制力を探し出し、作用するように働きかける。働きかけが失敗し、管理不能になると、人間関係的なやりとりでの解決は困難で、法律で対処せざるをえなくなってしまう。

Winnicott は「攻撃性には2つの意味があります」という[4)]。1つ目の意味は、攻撃性は欲求不満に対する直接的、または間接的な反応であり、2つ目の意味は、攻撃性は人のエネルギーの2つの主要な源のうちの1つということである。直接的な反応とは、おもちゃなどの取り合いになった時に力づくで相手から取り返すようなことであり、間接的なことは、そのあと機嫌が悪くなって保護者や保育者にぐずったり、物にやつ当たったりするようなことを示す。主要なエネルギーのふたつとは、死の本能と生の本能である。

乳幼児期の初期段階において、体の一部がぶつかることは、乳幼児が自分でない世界を発見し、それが外的世界との関係の第一歩であるという[4)]。まもなく、攻撃的な行動へとなっていくが、その始まりは動きを誘発したり、探求の始まりを導いたりする単純な衝動にすぎない。攻撃性は、いつも何が自己で何が自己でないかの明確な区別の確立とつながっているものだと述べている[4)]。

3. 攻撃性の発達過程

上記の Winnicott の記述を受けて、「攻撃性とそのルーツ」より発達段階や場面ごとに整理してみる。

攻撃性は生まれる前から備わっていて、子どもの体験を誘発している。年齢層により、その時あるべき攻撃性のあり方や体験がある。それを受け止める周囲の反応も、その年齢層で何を身につけるべきなのかによって明確にする範囲や許容度が異なってくる。

表の最下層には、月齢で考えることができない、心的に破壊に凌駕されそうな危機的状態を並列した。危機的な状態は、震災害や被虐待などの事態を想定している。このような危機的な状況下では、月齢にかかわらず似たような自己防衛的な反応を示し、本人のみならず周囲の人々をもどうしていいのかわからなくさせてしまう事態になることが多い。

Ⅲ. 考　察

日常生活でも教育場面でも心理療法場面でも、攻撃性を向けられたときは身がすくみ対応に困る。むきになって権威を振りかざしそうになる防衛的な自分がいる。しかし一旦そのような感情をわきに置いておいて向き合うと、それまで凝り固まって、てこでも動かなった相手の認識が変わり、一山越える感覚を持つことができる。自体験例や伝聞した多くの事例報告でも、攻撃性がうまく取り扱われると内的現実が変容していくように見えたの

表　攻撃性とそのルーツ：発達段階とその表われ

	事実	子どもの体験	状態理解	周囲の受けとめ
胎児～生後 5 か月	・動いた体の一部が何かに触れる。	・筋肉を動かす快感を得た。	・行動にはっきりとした理由をもっていない	
出生後～授乳期間	・200～300 回中 13 回未満、授乳時乳房を噛みつく。	・授乳を受けることは乳房を破壊していることという空想。 ・楽しいこと。 ・乳房を傷つけまいとして、がまんする。 ・怒りは経験するが、覚えていない。	・噛むときは、興奮しているときで、欲求不満を感じた時ではない。 ・大切なものを守ろうともしている。→妥協。 ・妥協による欲求不満を抱え込んでいる→別の機会に欲求不満を発散する。	・食欲の愛（おいしいものに夢中でむさぼりつき、満たされたい）。 ・興奮中に高まるもの。 ・母親によっては乳児が野蛮な存在に感じられ、憎しみを覚える。
生後 5 か月～	・意識的に噛む。興奮している間に強まる。 ・感覚を持たないものを噛むようになる。	・噛みたいという衝動を感じる。 ・行為を行使することは非常に楽しい。	・攻撃性が愛と結合。 ・活動性に近いもの。 ・憎しみを向けるものではない。 ・食欲と攻撃性の分離。	・攻撃が向けられていないかのようにふるまう。 →罪悪感を感じなくても済む →欲求不満に自力で対処 ・世話を通して身体的要素が処理される。
幼児期	・生活場面で競争心や創造的な表現をする	・自分で対処できないことは空想で処理。 ・破壊し、建設したい。 ・空想や言葉により魔術的に破壊したい。	・自分の攻撃性を認め、空想の中で償いや回復をしてみる。	・攻撃性を否定しない。 ・子どもの攻撃性を否定すると、子どもを感傷的な状態にする（ちょっとしたことに対しても勝負や権限にこだわり敏感に反応する）。
少年期～青年期	・攻撃的な発言をする。 ・楽しい時間を子どもの腹立たしい行動で台無しにされる。 ・遊び、仕事、芸術。	・自分の希望が聞き遂げられていないから、嫌な思いをさせてやる。 ・ことを正したいという無意識の願望。	・欲求不満の表出。 ・自分の力の顕示。 （なんとなく疲れさせる→自分にために疲れさせた→自分の機嫌を損ねた罰として） ・無意識の空想でなされた危害への無意識的後悔。	・ゲームなどを通して、欲求不満を処理。 ・悪を表現しても危険がなく楽しめる範囲にコントロールする。 ・ゲームや仕事で競争力を大いに掻き立て発散させる。 ・徐々に権威を撤退させる。 ・すべての達成の背後にある必死の苦闘を高く認める。
月齢によらず破壊に凌駕されそうな時	・破壊的なふるまい。	・自分ではどうにもできない。外界にある何かによって、どうにか収拾してほしい。	・内面を外側に裏返しにし、内的世界を外的に表出→他者や見通しへの期待。 ・溜めこむと消耗、抑うつ状態へ。	・大人が権威をもって抑え込む。 ↕ ・黙して本質を見極め、必要な支援と環境の用意。

で、攻撃性を取り扱うことは内的現実を相対化する機能を持つのではないかと考え、論を起こすこととした。

しかし、攻撃性の本質を抑えれば当然のことで、Winnicott が「乳幼児期の初期段階において、体の一部がぶつかることは、乳幼児が自分でない世界を発見し、それが外的世界との関係の第一歩となる。（中略）攻撃性は、こうしていつも何が自己で何が自己ではないかの明確な区別の確立とつながっています」と述べている通り、自身の欲求不満から発生した攻撃性を原動力にして、身体的な接触や対人上の衝突を起こし、人は外的世界を知ることになる。外的世界との関係は「自分でない」ものとの出会いであり、その出会いは同時に内的現実（「自分である」もの）に「汝はいかなるものか」と問いていくわけだから、内的現実が相対化するのは当然である。この過程を経て、自分の知っていた現実がただの自分だけの内的現実にすぎないということに気づいていくことになる。ただし、それは以降のプロセスが順調に熟していけばという話で、その前段階の外的現実を受け入れるだけでも痛みが伴い、内的現実の相対化過程には紆余曲折がある。心理療法はこのこじれた紆余曲折を取り扱う場であり、「葛藤とその葛藤を克服しようとする欲求こそが創造性をもたらす」[2]（Klein）ことを身を持っていて体験してもらう機会なのである。

攻撃性の取り扱いには、表で示したように、攻撃性を意識的に用いているかいないか、自分自身の攻撃性を否定するかしないか、自己顕示や達成感のための攻撃性をどのように許容するかどうか等、発達段階に応じて強調点や対応のポイントがある。保護者や保育者・教育者、その他の大人たちは、特別このような知識を持っていなくても、目の前の子どもの年やありようを見て、直感的にポイントを調整して対応している。子どもたちはそのような導きと見守りの力を借りて、自分の攻撃性を自分のものにしていく。しかし、Winnicott が「攻撃性」の中で紹介していた 2 歳半の男児のケースではそういういうわけにはいかなかった。その男児は、ほとんど模範的な子どもといってよい状態だったが、ただひとつ「突然立ち上がって、人に噛みつく。血が出るほど強く噛むことすらある」という問題を抱えていた[3]。2 歳半の発達では、直接人を噛むという行動ではなく、空想の中で噛みたい衝動を満たすことができるはずだが、この児童の攻撃性は、「興奮して単にどうして良いのか分からない時だけ」という乳児期に顕著な攻撃性によるものだった[3]。この事例のように、生活年齢とはかけ離れた発達の中にいる場合は、生活年齢に合わせても解決を見ることはできない。その攻撃性が求める発達のテーマに合わせて、周囲も受けとめていく必要がでてくる。表の最下層に記してあるような「月齢のよらず破壊に凌駕されそうな時」も、生活年齢に囚われず、子どもの必要性に合わせて対応していく必要がある。

攻撃性の表出は破壊的で排除すべきもののように見えても、「人のエネルギーの 2 つの主要な源のうちの 1 つ」（Winnicott）であるということから、完全に抑え込んだらいいというものではない。攻撃性で外の世界と出会い、生き生きとした体験を展開し、自分の道を切り開いていこうとするのにも攻撃性が必要である。ある意味子どもの成長を見届けるとは、攻撃性の表現が洗練されていく過程をプロデュースしていくことなのかもしれない。

Ⅳ．おわりに

Klein は、自身が 3 人の子どもを持つ母であり、多くの弟子たちの姉的母親的存在であり、多くの子どもや大人の分析家であった。Klein の攻撃性に関する見解や態度は、子どもや弟子たち・被分析者から向けられる、欲求不満や創造的な抗いによって鍛えられてきた。Klein こそ憎まれながら攻撃の嵐を生き残り、葛藤を克服して巣立っていく子どもや弟子たち被分析者の背中を見送ってきた。

Winnicott は自身が小児科医であることより、子どもの発達に絶大な信頼を置いていた。子どもたちの耳障りな金切り声は攻撃的な表現であるが、それすら生きるエネルギーの一部であると見なすことができた。同時に、普通の健康な親が、子どもの攻撃的な振る舞いに対して権限を翳して必死で場を納めようとする必死さもわかっていた。一方で、戦時中扱いにくい疎開児童に対する取り組みの中で、不幸な育ちを持つ扱いにくい児童の攻撃的な訴えですら、破壊したい意思が含まれているとはかぎらず、切実さや正当な抗議、現状を打開して創造していきたい意欲の表れであることを見出してきた。Winnicott は治療者として、彼らの声を代弁していくことが社会に子どもたちを帰していく道であると考えていた。

攻撃性について論じた 2 人の背景を考慮すると、攻撃性に対する攻防よりも、人間の本質や成長していく人への愛情を感じる。この思いこそが、内的現実、それも攻撃性にまみれた内的現実を取り扱い、攻撃性から子どもを救い出すスタンスなのではないかと考える。

攻撃性を取り扱うということは、攻撃性として現れた訴えの正当性を抽出し、攻撃性を伴わない本来の訴えに回帰させ、行為者の打開したい意欲を支えることである。攻撃的な言動を禁止したり抑制したり、ましてやかわしたり丸め込んだりすることは、表面的な対応であり、行為者でなく攻撃を向けられた「被害者」の存在を

守ることがその主眼にある。攻撃の中にありながらも、行為者の正当性、健全性を信じてたえることが求められている。

上記が攻撃性にまつわる言動を全般的に扱う心理的な見識だと筆者は考えるが、それでも受け止めきれたかどうかの成否は「結果だけが知っている」というものである。過不足なく読み取り、それに基づいて対応できているからといって、必ず攻撃性を安全に取り扱えるという保証はない。攻撃性に向き合うということは、「計算」を差し挟むことが許されない真剣勝負のことが多いからだ。結果、対処できなかったとしても、攻撃性に関する上記のような見識を持っていれば、謙虚に不足を振り返ることができる。またお互いへの期待を捨てていなければ、仕切り直しをする機会が持てるかもしれない。少しの希望もって関係を切らず、次の機会を待つことができる。

注

ⅰ）ひとつの内的現実の破綻によって発見される外的現実は、即座に内的現実化されるので、外的現実は外的世界と表現した方が適切かもしれない。

ⅱ）事例について統計的検証をしたわけではないが、攻撃性という観点だけで、各種学会での事例報告や事例を検討した論文などを見ると、面接構造を脅かす遅刻・キャンセル・各種ルール破り、攻撃性を隠ぺいしたほめそやし等ほとんど攻撃的な心性の表われと理解してよい事態で事例が危うい状態になり、それを適切に対応することによって事例が持ち堪えたという展開になっている。事例が展開する中で、追い詰められた被分析者が、その恐怖と不安を攻撃的な形で表現したためと考えられる。

ⅲ）ボードゲームやテレビゲームなどの具体的なゲームの種類ではなく、一定のルールの中勝利を得るために一心に取り組むもの全般を示す。上記のような具体的なゲームでもよいし、スポーツ全般もこの中に含まれる。

引用文献・参考文献

1）Bion, W. R. 1962, Leaning from experience（ウィルフレッド・ルブレヒト・ビオン、福本修訳『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局　1999 年、13-116 頁　収録）

2）Klein, M. 1957, Envy and gratitude（メラニー・クライン、小此木啓吾・岩崎徹也編訳『羨望と感謝：メラニー・クライン著作集 5』誠信書房　1996 年、3-89 頁　収録）

3）Winnicott, D. W. 1939,「攻撃性」（D. W. ウィニコット、西村良二監訳『愛情剥奪と非行：ウィニコット著作集 2』岩崎学術出版社　2005 年、97-105 頁　収録）

4）Winnicott, D. W. 1964「攻撃性の起源」（D. W. ウィニコット、西村良二監訳『愛情剥奪と非行：ウィニコット著作集 2』岩崎学術出版社　2005 年、88-97 頁　収録）